

川越^{とうざん}唐棧

「川越唐棧」は、江戸時代に東南アジアからもたされた縞木綿のことです。特徴は平織りで、極めて細い双糸を使うことにより、木綿でありながらも絹そつくりの風合いを持っています。そのほとんどが細かい縦じまの柄で、当時の日本人には初めて見る模様であったことから、人気を博しました。

ただ、この粋な唐棧も、庶民や町人には大変高価で手が出せるものではありませんでした。その後時代は動き、安政の開国とともに極めて細い木綿糸が欧米諸国から安く輸入できるようになり、さらに川越志義町の絹平問屋の中島久平も、横浜開港後にイギリスから木綿糸を仕入れ、川越にはたくさんあった機屋（はたや）に唐棧柄を織らせました。ここで織られた安価で品質の良い川越産の唐棧は大変な人気となり、川越唐棧は「川唐」（かわとう）と呼ばれるほどになりましたが、このブームも明治30年位までで、その後の化学繊維の台頭などにより、昭和初期には消滅していきました。

しかし、昭和50年代になると、川越唐棧は入間市の西村織物によって機械生産が開始されたことで復活します。その後「川越唐棧 **Reborn** プロジェクト」などの活動により、その認知度は年々高まってきており、今では反物以外にも、アクセサリーやストール、ポーチ等様々な製品に形を変え、川越でしか手に入らない土産として人気を博しています。